SY11-3

小児訪問看護師の人材育成の重要性

市川 百香里

公益社団法人 岐阜県看護協会重症心身障がい在宅支援センター みらい

私は(公社)岐阜県看護協会が岐阜県からの委託で2015年に開設した「重症心身障がい在宅支援センターみらい」(以下「みらい」という)で家族支援専門看護師として活動している。「みらい」の対象は、障がい児者で多くは医療的ケアが必要である。そして低年齢になるほど、重症度が高く医療ケアが複雑である。このような子どもたちと家族が在宅で最初に利用するのは訪問看護である。しかし「みらい」が開所時、子どもを対象に活動実績があった訪問看護ステーション(以下St.という)は岐阜県の都市部でもわずかで、訪問看護を利用できない子どもたちが多くいた。地域で子どもと家族を支えるため訪問看護は、ケアの提供はいうまでもなく、子どもと家族の成長発達過程で必須となる多職種連携の要となりうる。そのため訪問看護の充実が急務であると考えた。近隣の数か所のSt.の聞き取りでは、子どもの訪問看護を実施できない理由には「子どものもつ疾患の複雑さがあるため、疾患や成長に関しての適切なアドバイスができない」こともあったが、「病院で医療的ケアを習得してくる家族にとってはそれが最良の方法で、初めて会う訪問看護師が提供するケアには不信感を持たれる」「親のニーズを優先する訪問看護師のケアスタイルが、専門職として理解されていないため、ヘルパーと同じような作業を依頼される」など、家族との関わりの困難さも多く聞かれた。そこでSt.の看護師を対象に、自信をもって専門職としての関わりができることを目標とした教育プログラムを計画し実施した。教育プログラムは、県内の看護職を対象とした「出前講習」である。St.は少人数での運用が多く、業務の都合上、出張による集合研修に参加することが難しい。そのため、こちらから出向く出前講習を企画した。出前講習受講の募集は「みらい」のホームページや機関誌を用いて広報した。講習の時間はSt.の都合に合わせて計画し、各回60～90分の講義とディスカッションの構成で、全6回とした。講習の内容は、①「子どもの成長発達の理解」②「子どもの権利・倫理的課題」③「重症心身障がい児の観察のポイント」④「重症心身障がい児のフィジカルアセスメント」⑤「家族支援」⑥「事例検討」とした。特に最後の事例検討では、子どもの疾患からアセスメントする思考ができるような説明と共に、必ず家族のアセスメントを行い、家族への介入方法の検討を行うようにしている。また可能であれば、その時点で実際にSt.が支援中の子どもや家族の事例を用いて行い、明日にでも実践できるような即時効果も提供しながら実施している。出前講習の受講をきっかけに、新たに子どもの訪問看護を始めたSt.もある。またSt.のみならず、児童発達支援事業所などからも問い合わせがあり、多職種参加による講習にも発展した。さらに副次的な効果として、この出前講習をきっかけに、県の小児在宅支援の研修会を「みらい」主催で年一回実施することとなり、私は企画運営統括の役割を担っている。当初は地域の看護師の小児看護についてというテーマだったが、多職種連携の不足が課題となり、4年前から対象を多職種に拡大し「困難事例」「意思決定支援」「連携」「チーム作り」というテーマを設け、講義と事例検討を実施している。今後は全体の質の向上のため、事例検討をどのように積み重ねていくか、関係職種を交えて検討中である。今回はこの取り組みについて紹介する。